

大学発アーバンイノベーション神戸 研究成果報告書



大学発アーバンイノベーション神戸
University's Urban Innovation Kobe

研究課題名：魅力づくりのための、神戸の歴史的風景に含まれる「匂い」や「音」といった視覚以外の感性価値に主軸を置いた観光資源開発に関する研究

研究期間：2022年4月～2024年3月

交付決定額(研究期間全体)：1,000千円

申請区分：一般助成型
課題番号：A22114

研究代表者：神戸大学 計算社会科学研究センター
特命講師 小代薫



1. 研究成果の概要

本研究において、
神戸の気候的特色に触れた25の文学作品（平安から現代まで）
のコンテンツ化が完了した。これにより神戸の気候的特色の観光資
源化（あるいは次代のまちづくりへの導入）に向け準備が整った。

2. 研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：

「歴史まちづくり」の新たな手法として地域の気候的特徴の活用可能性を示したこと。

社会的意義：

単に観光資源化という観点にとどまらず、今後より精緻になると予想される都市内微気象シミュレーションと連携することで、日頃から気象情報への関心をたかめ、防災意識の向上にも寄与する可能性があること。



3. 研究開始当初の背景

背景：

神戸では三宮を中心に再開発が進んでいるが、固有の地勢を生かす手法は未発達であり、近隣都市と横並びの風景が生まれるのではないかと課題認識があった。

4. 研究の目的



本研究では、地勢に恵まれた神戸ならではの多様な「匂い」や「音」といった視覚情報以外がもたらす感性的価値と、固有の歴史文化との紐付けを行い、その心象風景の意識化をおこなうことで、あらたなまちづくり手法の開発に繋げることを目的とする。

5. 研究の方法

平安時代から現代まで、神戸を舞台にした下記の文学作品のうち、神戸の気候的特色を描写した箇所を含む25作品を選びコンテンツ化

【古代】：『万葉集』不詳

【平安時代】：『伊勢物語』作者不明、『高倉院厳島御幸記』源通親、『平治物語』不詳、『源平盛衰記』不詳

【鎌倉時代】：『方丈記』鴨長明、『明月記』藤原定家

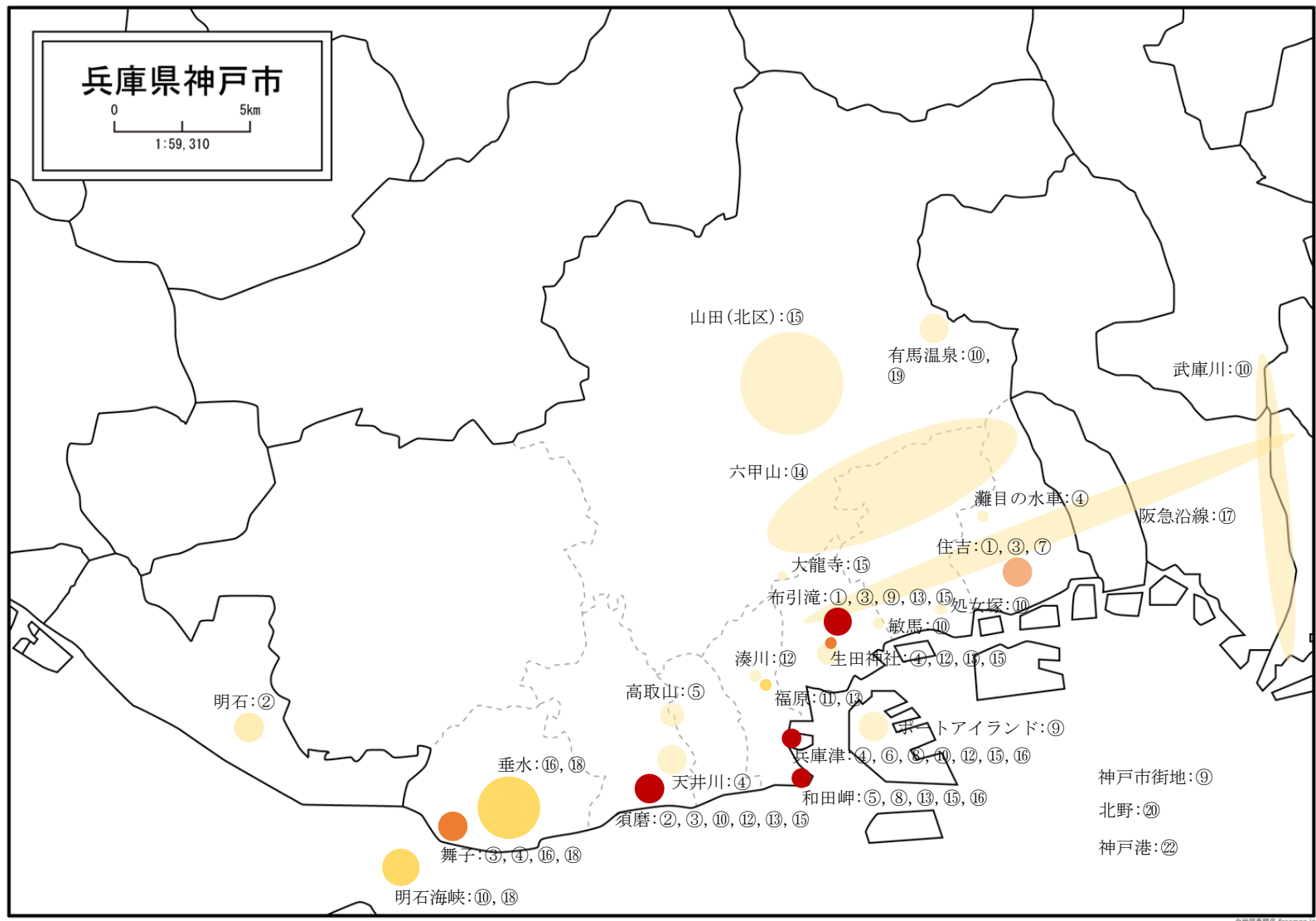
【江戸時代】：俳句・松尾芭蕉、『革令紀行』『小春紀行』大田南畝、『江戸参府紀行』シーボルト、『菜の花の沖』司馬遼太郎、『摂津名所図会』秋里籬島、『播州名所巡覧図絵』秦石田

【幕末・明治】：『玉島兵庫紀行』新島襄、『アーネスト・サトウ公使日記』アーネスト・サトウ

【近・現代】：『孤高の人』新田次郎、『細雪』谷崎潤一郎、『心』ラフカディオ・ハーン、『街道をゆく』司馬遼太郎、『阪神風景漫步』北尾鐔之助、『明石海峡』北尾鐔之助、『麒麟の志』陳舜臣、『華麗なる一族』山崎豊子、『風の歌を聴け』村上春樹、『孤愁ーサウダーデ』新田次郎・藤原正彦

文学作品の抽出に関して神戸学院大学谷口義子氏に多大なご協力を頂いた。

6. 研究成果



● 5回以上 ● 4回 ● 3回 ● 2回 ● 1回

- 『伊勢物語』：不明
- 俳句：松尾芭蕉
- 『革命紀行』『小春紀行』：大田南畝
- 『江戸参府紀行』：シーボルト
- 『孤高の人』：新田次郎
- 『菜の花の沖』：司馬遼太郎
- 『細雪』：谷崎潤一郎
- 『心』：ラフカディオ・ハーン
- 『街道をゆく』：司馬遼太郎
- 『万葉集』：不詳
- 『方丈記』：鴨長明
- 『玉島兵庫紀行』：新島襄
- 『高倉院殿島御幸記』：源通親
- 『アーネスト・サトウ公使日記』：アーネスト・サトウ
- 『摂津名所図会』：秋里籬島
- 『播州名所巡覧図絵』：秦石田著、中井藍江画
- 『阪神風景漫步』：北尾鐐之助
- 『明石海峡』：北尾鐐之助
- 『明月記』：藤原定家
- 『麒麟の志』：陳舜臣
- 『華麗なる一族』：山崎豊子
- 『風の歌を聴け』：村上春樹
- 『孤愁』：新田次郎・藤原正彦
- 『平治物語』：不詳
- 『源平盛衰記』：不詳

6. 研究成果



005	神戸の観光資源開発研究データベース				
作品名	『孤高の人』	作者名	新田次郎	時代	初版 1969年
場所	高取山・和田岬			季節	冬・夏・秋
出典	新田次郎『孤高の人』（上）新潮文庫 2000年				
その他					

■概要

新田次郎（1912-80）は長野県諏訪出身の直木賞作家。山岳小説や歴史小説を多く書いたが、前職は中央気象台の職員であり、富士山測光所などに勤務した。このため作品中には気象に関する描写がよくみられ、特に冒頭の高取山からの眺望の情景には新田の気象に関する知識や観測眼が反映されている。

本作『孤高の人』は、昭和初期に活躍した登山家の加藤文太郎（1905-36）をモデルにした山岳小説である。加藤は但馬の浜坂出身。神戸の三菱内燃機製作所（現・三菱重工業）に勤務し、アマチュア登山家として日本アルプスの山々を踏破した。

〔高取山／冬〕

雪がちらついているのに意外なほど遠くがよく見えた。厚い雪雲の仮面と神戸市との間の空気層の間隙の先に淡路島が見えた。雪雲の底の平面は、鉛色をした海と並行したまま遠のいて行って、水平線との間に、くっきりと一条、青空を残して終わっていた。そこには春のような輝きがあった。

神戸市の背後の山陵を覆った雪雲の暗さから想像すると、間もなくはげしい風を伴った、嵐にでもなりそうな光景であった。神戸としては珍しいことである。

若者は、その雲の底を生まれて初めてみる怪奇な現象であるかのように見詰めていたが、首が痛くなると、目を足もとの神戸市外とそのつづきの海にやった。神戸に生まれて、神戸に育っているながら、このたった三二〇メートルの高取山の頂上に、こんなすばらしい景観が展開されることをこの瞬間に発見したような気がした。

若者は、そういう気持ちになるのは、たぶん、頭上にある雪雲のせいだと思った。いまにも降り出しそうな顔をしていて、いっこうに降りそうもなく、時折申しわけのように雪華を落して来る頭上の雪雲の存在からして奇異に感じられ、その雪雲の下にある空間が冷酷なほど豁然とした拡がりを持っているのは、その次に、起こるべき大きな自然現象の変異を予告しているように思われた。（P5）

〔和田岬／夏〕

海は近いのに海からの風は、研修生たちの住んでいる寮までは吹いてこなかった。夜になると、ぴたりと風はやみ、寮の中は蒸し風呂のような暑さだった。（P31）

〔和田岬／秋〕

秋のおとずれは海からやってきた。土用波が岸壁に当たってだけ散る音を聞いていると、かけ足でやってくる冬の海を感ずる。（P36）

6. 研究成果



007	神戸の観光資源開発研究データベース				
作品名	『細雪』	作者名	谷崎潤一郎	時代	昭和初期
場所	芦屋（住吉）			季節	夏、秋
出典	谷崎潤一郎『細雪』中公文庫 2014年				
その他					

■概要

谷崎潤一郎（1886-1965）は、明治から昭和初期まで文壇を牽引した作家である。20代で小説『刺青』を発表し、耽美的な作風の小説を書いた。関東大震災を機に関西へ移住し、阪神間を転居しながら上方文化をモチーフにした作品を多く執筆した。代表作『細雪』は東灘区の住吉村での実生活をもとに、大阪船場の旧家蒔岡家の四人姉妹を描いた長編小説である。主人公・幸子の住居は芦屋と設定されているが、屋敷や庭の描写は住吉の家がモデルとなっており、その屋敷「倚松庵」は当時のままに保存され、神戸市のミュージアムとして公開されている。なお、作中に描かれた阪神大水害は、谷崎自身が体験したものであるが、執筆にあたっては当時の新聞や甲南高等学校校友会編纂「阪神地方水害記念帳」を参考にしたという。

〔阪神大水害〕

その舞の会があってから、ちょうど一箇月目の七月五日の朝のことであった。いったい今年は五月時分から例年よりも降雨量が多く、入梅になってからはずっと降り続けていて、七月にはいつからか、三日にまたしても降り始めて四日も終日降り暮らしていたのであるが、五日の明け方からはにわかに沛然たる豪雨となつていつ止むとも見えぬ気色であった。が、それが一二時間の後に、阪神間にあの記録的な悲惨事を齎（もたら）した大水害を起こそうとは誰にも考え及ばなかった（以下略）（P294）

〔阪神大水害〕

水は黄色く濁った全くの泥水で、揚子江のそれによく似ている。黄色い水の中に折々餛のような色をした黒いどろどろのものも交っている。いつか貞之助はその水の中を歩いているので、おや、と思って心づく、散歩の時に覚えのある田中の小川が氾濫していて、それに架した鉄橋の上にさしかかっていた。鉄橋を渡って少し行くと、線路の上はまた水がなくなったが、両側の水面は大分高くなっている。貞之助はそこで立ち止まって前方を眺めた時、さっき甲南学校の生徒が「海のように」と云ったのは、今自分の眼前にあるこの景観のことなのだと合点が行った。雄大とか豪壮とかいう言葉を使うのはこの場合に不似合いのようだけれども、事実、最初に来た感じは、物凄（ものすごい）いというよりはそういう方に近く、驚くよりは茫然（ぼうぜん）と見惚（ぼろ）れてしまった。いったいこの辺は、六甲山の裾が大阪湾の方へゆるやかな勾配をもって降りつつある南向きの斜面に、田園があり、松林があり、小川があり、その間に古風な農家や赤い屋根の洋館が点綴（てんずい）しているといった風な所で、彼の持論に従えば、阪神間でも高燥（こうそう）な、景色の明るい、散歩に快適な地域なのであるが、それがちょうど揚子江や黄河の大洪水を想像させる風貌（ふうぼう）に変わってしまった。そして普通の洪水と違うのは、六甲の山奥から溢れ出した山津浪（さんしんろう）なので、真っ白な波頭を立てた怒濤（どたう）が飛沫（しぶき）をあげながら後から後からと押し寄せて来つつあって、あたかも全体が沸々と煮えくり返る湯のように見える。たしかにこの波の立ったところは川でなくて海、――――どす黒く濁った、土用波（どようなみ）が寄せる時の泥海（どろかい）である。（P305～306）

〔阪神間の空気〕

彼女（幸子）はまたしても、雪子が滞在中、ともすればさも懐（なつ）しそうに、--あるいは名残り惜（なごりおし）しそうに、--この庭のあちらこちらにゝむことがあるのを想（おも）い起した。こうしてみると、雪子ばかりではない。自分もやはり生粋（なまじ）の関西人であり、どんなに深く関西の風土に愛着（あいしやく）しているかが分る。別に取り立てて風情（ふうせい）もないつまらないこの庭だけれども、ここにゝんで松の樹の多い空気の匂（にお）いを嗅（か）ぎ、六甲方面の山々を望み、澄んだ空を仰ぐだけでも、阪神間ほど住み心地のよい和やかな土地はないように感じる。（P421）

6. 研究成果



009	神戸の観光資源開発研究データベース				
作品名	『街道をゆく』	作者名	司馬遼太郎	時代	昭和50年代
場所	神戸市街地、ポートアイランド、布引			季節	夏
出典	司馬遼太郎『街道をゆく：21 神戸・横浜散歩ほか』朝日新聞社 1996年				
その他					

■概要

司馬遼太郎（1923-1996）は、『竜馬がゆく』『国盗り物語』『坂の上の雲』をはじめとする歴史小説のほか、『街道をゆく』などの随筆を数多く執筆した。日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章受賞。本作『街道をゆく』は、雑誌「週刊朝日」に連載された紀行文で、連載は25年間続いた。神戸編の連載は、1982（昭和57）年の秋から冬にかけてである。

[空気の色]

二十年ばかり前、京都は人を緊張させるところがあるが、神戸はそうではなく、開放的で、他人のことにかまわず、空気まで淡くブルーがかっていて、疲れたとき歩くのにちょうどいい、と感じたことがある。神戸、京都とも、都市的個性が、日本の他の都市からみれば異国のようにきわだっている。都市というより、ときに、あれは――文化的閉鎖性と郷土愛のつよさをふくめて――国だと思ふことがある。（「神戸散歩」／P138）

[六甲山地のすがた]

神戸には、人工島の南端にあるホテルにとまった。
部屋にいと、沖のただなかにいるようで、気分がいい。まちの方向をみると、東から西へ連峰が緑におおわれてつらなっている。東からかぞえと六甲山頂、摩耶山、再度山、ひよどり越から一ノ谷にいたるまでが一望のなかにある。それらの山麓が、市街地になっている。市街地だけでいえば、東京の一区か二区ほどで、都市としてまことに適正な規模といいいい。（「布引の水」／P154）
※本文1行目の「人工島の南端にあるホテル」は開業間もないころの神戸ポートピアホテルであろう。開業時はポートアイランドの南端に位置しており、「部屋にいと、沖のただなかにいるよう」な印象があったが、ポートアイランド第2期工事によってホテル南側の海面が埋め立てられ、司馬遼太郎が書いた景観は失われた。

[滝の音]

私どもは、神戸市街地からいえば、空中にいる。小径はなにやら地の底までくだってゆく感じがあるが、布引の滝のうちの「雄滝」については、枝道を右へ折れる。私どもは、標識どおり右へ折れた。すべて雑木林の中である。どの葉も陽をはねかえしているなかで、わずかに合歓ノ木だけが、淡紅色の色どりをにじませていた。
枝道をくだってゆくと、樹間のむこうに滝の音がとどろきはじめた。ゆき止まりが、茶屋である。
崖にひっかかるようにして建てられている。茶屋の若草色のれんに、「おんたき」という文字が染めぬかれているところから、雄滝は近畿のなまりどおり、おんたきと訓むのかもしれない。（「布引の水」／P155-156）

6. 研究成果



017	神戸の観光資源開発研究データベース				
作品名	『阪神風景漫步』	作者名	北尾鐔之助	時代	1929年（昭和4）
場所	御影・石屋川・阪急電車・阪急沿線			季節	夏
出典	北尾鐔之助『近畿景観』創元社 1929年				
その他					

■概要

北尾鐔之助（1884-没年不明）は名古屋生まれ。東京高等商業学校を中退、名古屋新聞社を経て1912（大正元）年に大阪毎日新聞社に入社。学芸課長、出版編集課長（サンデー毎日編集長、ホームライフ編集長）、写真部長、その他を歴任。米国、満支、南洋方面の文化映画の制作、写真旅行など、写真と執筆業に関わった。『近畿景観』9巻および紀行、写真、観光に関する著書多数。晩年は西宮市に在住した。『近畿景観』は、北尾が歩いた近畿の各地を紀行文的に書いた随筆集で、阪神間に題材を求めた初巻（初巻に番号はついていない）には昭和初期のモダニズム風景が描かれる。なお、引用文は常用漢字を用いている。

〔阪急電車〕

阪急電車も、阪神電車も、乃至国道電車も、その停留所の乗降客によつて、土地の生活分布を知ることが出来る。

阪急電車では、六甲、御影から多くの西洋人が乗った。神戸から毎日必ず顔を合はせる品のよい老人があつた。その人はいつも御影で降りた。日曜日など、若い娘にニツカーを穿かせて、リュツクサツクを背負つた西洋人の一家が、よく六甲で降りて山に入るのを見た。私はいつも、その人たちの逞しい体格や、人を圧するやうな風貌を美しく見送る。御影あたりに住んでゐる西洋人の細君たちは、神戸の市場で求めた食料品をバスケットにつめ込んで、この電車で帰つて行つた。何とかいふ露西亜の美しいダンサーの顔もしばしば見受けた。

御影＝岡本＝芦屋川では、阪神間における、最もモダンな色彩を乗せる。それは大概、ブルジョアの家族たちで、目のさめるやうな振袖か、でなければ、スマートな洋装である。それは阪神における、有名な実業家の誰々と指すことの出来るやうな人たちであつた。若い細君たちは、長いクラブを抱へて、よく、その日のゴルフゲームの話をした。（『近畿景観』 P28-29）

〔阪急沿線〕

私は、阪神間の交通路の中で、阪急沿線ほど、美しい色彩に富んでゐるところはあるまいとおもふ。大阪以西、西宮までの平坦地は、三月の中頃になれば、ぼつぼつ蓮華、菜の花が染め出し、四月に入ると、一望たゞ、菜の花の黄金の色にうづめられる。それから、夙川から山地に入つて、六甲に至るまでの沿道は、全く桜花爛漫の春を展開する。

阪神地方の山地は、多く黒松と砂岩の風景であるが、この沿線における桜の花は実に見事である。殊に御影＝岡本＝芦屋川の沿線、有産階級の庭園乃至、沿道における桜花の隧道は、はるの阪神を彩る唯一のものであらう。垣に咲く白ばらの群落、車窓から見下ろされる花壇の彩り、秋は到るところコスモスの花に埋められ、漸く花が終つて、新緑の頃になると、強い若葉の光が、走り去る車窓に映えて、下げ革をもつ娘の白い腕に、軽い単衣の若奥様の美しい顎筋に、軽快な初夏の緑の反射を送つた。（『近畿景観』 P31-32）

6. 研究成果



021	神戸の観光資源開発研究データベース				
作品名	『華麗なる一族』	作者名	山崎豊子	時代	1970年代
場所	栄町通、岡本、六甲山、舞子 など			季節	
出典	山崎豊子『山崎豊子全作品・1957-1985：第8巻』「華麗なる一族」上・下 新潮社 1986年				
その他					

■概要

山崎豊子（1924-2013）は大阪市生れ。京都女子大学国文科卒業。毎日新聞大阪本社学芸部に勤務。その傍ら小説を書き始め、1957（昭和32）年に『暖簾』を刊行。翌年、『花のれん』により直木賞を受賞。新聞社を退社して作家生活に入る。『白い巨塔』『不毛地帯』『二つの祖国』『大地の子』『沈まぬ太陽』など著作はすべてベストセラーとなる。1991（平成3）年、菊池寛賞受賞。2009年『運命の人』を刊行。同書は毎日出版文化賞特別賞受賞。大作『約束の海』を遺作として 2013（平成 25）年に逝去。

小説『華麗なる一族』は、1970（昭和45）年3月から1972（昭和47）年10月まで『週刊新潮』に連載されたのち、1973年に新潮社より単行本として出版された。主人公の万俵大介は、神戸の栄町通に本店を置く阪神銀行の頭取で、他にも不動産や鉄鋼など複数の企業を傘下に収める地方財閥の経営者である。一族の住まいは東灘の岡本にあると設定されており、作中には栄町通、岡本、六甲山、灘浜といった神戸の風景が描かれている。

[六甲山]
六甲山の朝は、四月初旬だというのにまだ霜柱がたち、肌寒い。
万俵大介は、カシミヤのセーターの上に厚手のウールのガウンを羽織り、スリッポンの靴裏で霜柱を踏みしだきながら、山荘内の雑木林をゆっくりと歩いていた。辺りは野鳥の羽搏きと囀り以外、森閑と静まり返り、山全体がまだ冬の眠りから醒めきっていない。
鶯の鳴声で、大介は足を止め、左手の深い谷の方へ視線を向けた。鶯は見えなかったが、夏に聞く音色より澄んで美しい。六甲山の自然も、ここ数年、目に見えて荒れ、野鳥も少なくなったが、万俵家の山荘がある聖者の道（シュライン・ロード）の辺りは、まだ自然の美しさが保たれている。万俵家の山荘は、先々代の龍介の代に、一山いくらの単位で買い入れたから、谷や沢を含めて数十町歩にわたり、六甲山のたいていの野鳥と植物に恵まれていた。（『山崎豊子全作品・1957-1985：第8巻』上／P135）

[灘浜]
神戸港に臨んだ灘浜臨海工業地帯は、朝からスモッグに掩われ、石油化学工場や、機械、造船工場から吐き出される煙が、北西の季節風に煽られて、海側の上空へ幾筋もの縞模様を描き出している。（『山崎豊子全作品・1957-1985：第8巻』上／P58）

022	神戸の観光資源開発研究データベース				
作品名	『風の歌を聴け』	作者名	村上春樹	時代	1970年
場所	神戸港			季節	夏
出典	村上春樹『村上春樹全作品：1979～1989①』講談社 2000年				
その他					

■概要

村上春樹（1949-）は京都生まれ。西宮市・芦屋市で育つ。兵庫県立神戸高等学校、早稲田大学第一文学部を卒業。ジャズ喫茶の経営を経て、1979（昭和54）年にデビュー作『風の歌を聴け』で群像新人文芸賞を受賞。上下430万部のベストセラーとなった『ノルウェイの森』をはじめ、主な作品に『羊をめぐる冒険』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』などがある。

本作『風の歌を聴け』には「この話は1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終わる。」と書かれている。この18日間とは、東京の大学に進学した主人公「僕」が故郷のまち（芦屋）に帰省し、夏休みを過ごした期間である。引用部分には神戸港の倉庫街の情景が描かれている。

[神戸港]

倉庫のひとつひとつはかなり古びていて、煉瓦と煉瓦の間には深い緑色の滑らかな苔がしっかりと貼りついている。高く暗い窓には頑丈そうな鉄格子がはめられ、重く錆びついた扉のそれぞれには貿易会社の表札がかかっていた。はっきりとした海の香りが感じられるあたりで倉庫街は途切れ、柳の並木も歯が抜けたように終わっていた。僕たちはそのまま草の茂った港湾鉄道の軌道を越え、人気のない突堤の倉庫の石段に腰を下ろし、海を眺めた。

正面には造船会社のドックの灯がともし、その隣には荷物を下ろして喫水線の上がったギリシャ籍の貨物船がまるで見捨てられたように浮かんでいる。デッキの白いペンキは潮風で赤く錆つき、その脇腹には病人のかさぶたのように貝殻がびっしりとこびりついている。

僕たちは随分長い間、口をつぐんだまま海と空と船をずっと眺めていた。夕暮の空が海を渡りそして草を揺らせる間に、夕闇がゆっくりと深い夜に変わり、幾つかの星がドックの上にまたたき始めた。（『村上春樹全作品：1979～1989①』 P105－106）

6. 研究成果



023	神戸の観光資源開発研究データベース				
作品名	『孤愁－サウダーデ』	作者名	新田次郎 藤原正彦	時代	2012年
場所	布引の滝・岡本梅林			季節	晩秋・早春・
出典	新田次郎・藤原正彦『孤愁－サウダーデ』 文藝春秋 2012年				
その他					

■概要

新田次郎（1912-80）は長野県諏訪出身の直木賞作家。山岳小説や歴史小説を多く書いたが、前職は中央気象台の職員であり、富士山測光所などに勤務した。

本作『孤愁－サウダーデ』は在神戸ポルトガル副領事であり、作家でもあったポルトガル人ヴェンセスラオ・デ・モラエス（1854-1929）をモデルにした評伝小説である。モラエスは『おヨネとコハル』『徳島の盆踊り』などの著作を通じて、知られざる日本や日本文化をヨーロッパに紹介した。

『孤愁－サウダーデ』は1979年から毎日新聞に連載されたが、1980年に新田が急死。作品は未完のまま半年後に文藝春秋から単行本として出版されたが、子息の藤原正彦（1943-）が30年余りをかけて取材を続け、続編を書き上げて完成させた。新田-藤原の共作は、2012年に出版された。

〔布引の滝〕

布引の滝の雄滝は雌滝に比較して、その名のように男性的だった。高い断崖の上から滝壺に向かって流れ落ちる勇壮な滝に彼はしばらく自分を忘れて見入っていた。（『孤愁－サウダーデ』 P93）

〔布引の滝への道／晩秋〕

モラエスはホテルの外に出た。人力車の車夫が寄って来たが、それには手を振ってことわると、神戸のことならよく知ってるのだと言わんばかりに、山手に向ってさっさと歩いて行った。山々の緑が間近に見えて来るあたりに、新築の洋館がぼつぼつ見えた。雑居区域として早くから外国人の居住を認められていたところである。海岸通りの外国人居留地区をオフィス専用として、山手の住居をかまえる外国人が増えているのも日清戦争後の特徴の一つである。

モラエスは布引の滝への道へ踏み込んだ。落ち葉が堆（うずたか）く積もっていた。枝から離れるのを惜しむかのごとく色褪せた葉をまだ枝につけているクヌギやナラの木もあったが、多くの落葉樹は葉を落とし、それが道に吹きたまっていた。その上を踏むとかさこそと音がする。晩秋のおいが全山に満ちていた。（『孤愁－サウダーデ』 P140）

〔岡本梅林／早春〕

年を越して明治三十四年の二月になって、二人は、市外の岡本の梅林に梅見に出かけることにした。

山本通りで人力車に乗って布引山の麓まで来ると、人家は少なくなり、畑地や他が多くなる。人力車はそこをひたすら東へ東へと走った。

梅林は山手にあった。そこまで来ると、モラエスは人力車から降りて歩いたが、およねが人力車を降りることは許さなかった。

梅は満開だった。その日は風がないので梅のにおいがそのあたり一面にただよっているようだった。モラエス夫妻は茶屋の縁台に腰をおろした。

（『孤愁－サウダーデ』 P338）

(参考文献)

山中俊夫他 生活環境のスメルスケープに関する研究 アンケート調査に基づくにおいの評価特性とにおいマップ 日本建築学会環境系論文集 第73巻 第623号
47-52 2008年1月

竹林英樹他 気象資源としての風の利用を目的とした街路形態と街路空間の風通しの関係分析 日本建築学会環境系論文集 第74巻 第635号 77-82
2009年1月

松井紀莉子他 住宅市街地の聴覚的景観と嗅覚的景観 都市空間構成要素との関係に着目して 日本建築学会計画計論文集 第79巻 第699号 1139-1148 2014年5月

只野大樹他 快適環境を考えた「におい」によるまちづくり ～港町・宮城県石巻市を事例として 第38回土木学会関東支部技術研究発表会 2011年5月